

16世紀の書簡詩に見るイソップ寓話の政治性

— Clément Marot と Thomas Wyatt —¹

楠木 佳子

イソップ寓話の作家といわれる紀元前6世紀ギリシャの Aesop は奴隷であったと言われる。15世紀末に Robert Henryson がイソップ寓話を含む13篇の寓話を収めた *The Fables* の中の「ライオンとねずみ (“The Lion and the Mouse”）」には、プロローグに Aesop が登場する。Henryson の「ライオンとねずみ」は、語り手が見る夢の中に現れる Aesop が、語り手に直接寓話を語り聞かせる二重構造となっている。語り手は Aesop に “O maister Esope, poet lawriate” (1376)² と呼びかけ、よい教訓を備えた寓話を話して欲しいと要求する。ここでは Aesop はその呼び名のとおり、語り手にとっては「師」である。

Henryson の描く Aesop が「師」であるように、イソップ寓話は数世紀にわたり、ヨーロッパ世界を中心に道徳、話法、語法などを学ぶ教育目的で利用されてきた。そしてその伝承の過程において、イソップ寓話は土地や文化、人種、そして政治的背景など複数の要因によりその形を変えてきている。故に、場所や世代を問わない普遍性を持つ「イソップのおはなし」は、登場する動物の特徴、物語の背景、展開、そして結末までもが、人々の記憶の中に少しずつ違った形でとどめられている。

16世紀フランスの宮廷人 Clément Marot とイギリスの宮廷人 Thomas Wyatt は、ほぼ同じ時期に友人にあてて書簡詩を書いている。どちらもよく知られたイソップ寓話を一話そっくり取り入れ、寓話が伝える教訓でもって友人へのメッセージとするものである。そしてそのメッセージは、「大衆にむけてわかりやすく語られる口承芸」という寓話の性質を主張すると同時に、多分に政治的な意味合いを含んでいる。

本稿では、16世紀の Marot と Wyatt の書簡詩に引用されたイソップ寓話を詳細に読み解き、本来子どもをはじめとする大衆に向けた教育的、あるいは道徳的

¹ 本稿は、第187回17世紀英文学会関西支部例会(2012年6月30日於大坂 YMCA会館)において発表した内容に加筆修正を施したものである。

² Henrysonの引用はすべて Fox編集の *The Poems of Robert Henryson* (1981) による。括弧内に行数を示す。

性質の強いイソップ寓話が、2人の書簡詩にどのように取り入れられ、機能しているかを見ていく。また16世紀から17世紀にかけて見られるイソップ寓話の政治性の高まりについて考察する。

イソップ寓話の政治性の歴史

Annabel Patterson は *Fables of Power* の中で、寓話に付された政治的性質について、その伝統は英国では John Lydgate が *The Horse, The Sheep and the Goose* を含む複数の寓話を書いたと考えられる14世紀末に遡ると述べる。さらに Patterson は “the period of the greatest significance was approximately the one hundred and fifty years from the last quarter of Elizabeth’s reign through the first quarter of the eighteenth century. . .”⁽²⁾ と位置づけ、16世紀末から18世紀初めにかけて出版されたイソップ寓話の政治色が特に顕著であったことを指摘する (Patterson 1991)。この Patterson の説を元に、まずは中世以降から17世紀末までのイソップ寓話の編纂物とそこに含有される政治性について、複数の版の寓話の「教訓」部分に焦点をあてて見てみたい。

1484年、初の英語版イソップ寓話集 *The Fables of Aesop* が William Caxton によって出版された。15世紀末には先述の Henryson 版 *The Fables* も出版されている。印刷技術の発達とともにイソップ寓話のさらなる社会的流行が始まったのである。

イソップ寓話の中でも良く知られる「ライオンとねずみ」では、寝ているライオンのまわりを走り回って起こしてしまったねずみに腹をたてたライオンが、ねずみを食べてしまおうとする。しかし「先々きつと恩を返すから」とねずみに命乞いをされ、ライオンはねずみの命を救う。ある時罨にかかったライオンのところへねずみが現れ、縄を噛み切って恩を返す。この物語から導き出されるのは、「小さきものを不当に扱うな」、「親切は決して無駄にはならない」、というような教訓であろう。

15世紀末の Caxton 版の「ライオンとねずみ (“The xviii tale is of the lyon and of the rat”)」の最後には “this fable teceth vs how that a man myghty and puysnant ought not to dyspraye the lytyll” (27)³ とあり、力のある者がそうでない者を軽視すべきでないという、ごく一般的な教訓が述べられている。一方で、同時代の Henryson 版 “The Lion and the Mouse” にはその教訓に、ライオンが国王の表象であることが明示されている。Patterson が “Henryson gave this

³ Caxtonの引用はすべて Jacobs編集の *The Fables of Aesop* (1889) による。括弧内に行数を示す。

fable a strong political turn, relating it evidently...to contemporary Scottish history.” (33) と解説するように、時のスコットランド王 James III の失政を揶揄した時事的なものという見方もある。だが一方で、Denton Fox が Henryson の寓話に見られる政治的なアレゴリーについて “the matters he complains of...were not confined to any single decade.” (xx) と主張するように、その生涯について詳細が不明である Henryson という人物が書いた寓話の政治的要素には、その具体性を裏付ける材料となる背景がほとんどないのである。15世紀末においては、大衆的な寓話と、幾分漠とした政治性をもつ寓話の両方が混在する状況であった。

しかしこの状況は時代がすすむにつれて様相を変える。15世紀末において政治化の兆しを見せていた Henryson 版のイソップ寓話をさらに先鋭化させるように、17世紀末の Rodger L'Estrange の *Fables of Aesop* に収められた “A Lion and a Mouse” にも、“There is no Subject so Inconsiderable, but his Prince, at some time or Other, may have occasion for him. . .” (16)⁴ と「君主 (Prince)」と「臣民 (Subject)」の関係について、その理想を述べるかのような教訓部がある。L'Estrange の版が持つ政治的メッセージの媒体としての、あるいは一種のプロパガンダとしての性質は、彼自身が *Preface* で次のように述べることで裏付けられる。

Change of Times and Humours, calls for New Measures and Manners; and what cannot be done by the Dint of Authority, or Perswasion, in the Chappel, or the Closet, must be brought about by the Side-Wind of a Lecture from the Fields and the Forests. (140)

L'Estrange の寓話集が最初に出版されたのは1692年である。彼自身、Charles II のイングランド帰還を支持するパンフレットを複数出版するなど王党派としての政治的活動は活発であり、James II によって爵位を与えられ地位を築いた後に、名誉革命期には William III に対する陰謀に関わったとして逮捕されるなど、17世紀の政治的混沌の中で権力の変遷とともにその身を翻弄された一人である。彼の晩年に出版された寓話集に付された政治性は “Change of Times and Humours” という L'Estrange 自身の言葉で表される17世紀の時事的政治性を色濃く投影したものであることは明らかである。

⁴ L'Estrangeの引用はすべて *Fables of Aesop and other Eminent Mythologists* (1692) による。括弧内に行数を示す。

もう一つ寓話を見てみよう。「田舎のねずみと町のねずみ」(以下、「2匹のねずみ」という寓話がある。田舎のねずみを訪れた町のねずみは、そのあまりに質素な暮らしぶりを見て田舎のねずみを町へと誘う。食料の豊富な町の台所で2匹はたらふく馳走を食べるが、不意に誰かが台所へ入ってきて2匹は逃げ惑う。慣れない田舎のねずみは、怯えながら贅沢をするより田舎でのんびり暮らすほうがよいと田舎へ帰っていく。一般に知られるこの物語の教訓は、「危険の伴う豊かな生活より、貧しくとも平穏な生活が良い」というものである。

15世紀末のCaxton版タイトル「2匹のねずみ (“The xii fable is of the two rats”)」におけるこの物語の教訓は, “And therefore hit is good to lyue pourely & surely For the poure lyueth more surely than the ryche” (18), すなわち「貧しくとも平穏な生活のほうがよい」という一般的なものである。こちらは同じく15世紀末出版のHenryson版“The Two Mice”においても, “Of eirthly ioy it beiris maist degre, / Blythnes in hart, with small possessioun.”(395-96) と、財産に関わらず得られる精神的な喜びへの言及で終わっている。一方で、後代のL'Estrangeの“A City Mouse and a Country Mouse”に付された*The Moral*には、町と田舎が「宮廷と田舎」を意味することが明示されている。

The Difference betwixt a Court and a Country Life. The Delights,
Innocence, and Security of the One, Compar'd with the Anxiety, the
Lewdness, and the Hazards of the Other. (11)

17世紀末から18世紀の初めにかけて、L'Estrangeの版が英国で8版出版されているという事実からは、その人気と時代における需要の高さがうかがえる。大衆文学としての流行初期の版と比較すると、2世紀後のL'Estrange版には明らかに宮廷界の実情と腐敗をほのめかす文言があり、ある特定の領域の読者にとって特に政治的示唆に富んでいたことは間違いない。

ここに見た2つの寓話の例からは、印刷文化の発展初期におけるCaxton版が特に重要とした大衆文学的性質から、L'Estrangeが試みる、寓話を社会批判の媒介として利用する政治的性質への、時代の変化に応じた寓話を持つ意味合いの変遷が読みとれる。またHenryson版においては各々の寓話において両方の性質が備わっていると言えよう。イソップ寓話のもつ大衆文学としての側面と政治的アレゴリーとしての側面は、時代や文化、政治事情、そして作家自身のおかれた状況によって常にどちらかが前景化し、その目的を果たしてきたのである。そしてこれから見るMarotとWyattの作品には、彼らがおかれていた政治的状況を色濃く反映したより具体性の高い「ライオンとねずみ」と「2匹のねずみ」が用

いられているようである。

Clément Marot の「ライオンとねずみ」

Marot は国王 Francis I の姉である Navarre 妃 (Marguerite de Navarre) を強力なパトロンとして活動した宮廷人である。1526年、Marot は異端罪で投獄されている。「ルター派」という当時宗教的に危険人物とされる誰にでもあてはめられ得る罪状によるものであったが、この際には Navarre 妃に近い聖職者の介入により釈放されている。この時の罪状については、四旬節の断食を破って肉を食べたことであるという説もあり、詳細は不明である。

次に見る *Epistre à son amy Lyon* は、この投獄の際に Marot が友人の Lyon Jamet に宛てて書いた書簡詩とされ、「ライオンとねずみ」の話を引用して Lyon に救済を求める内容である。Marot のバージョンの特徴の1つは、物語導入部の「ライオンがねずみを助ける」場面にある。

Cestuy Lyon plus fort qu'un vieulx Verrat,
Veit une fois, que le Rat ne sçavoit
Sortir d'ung lieu, pour autant qu'il avoit
Mangé le lard, & la chair toute crue:
Mais ce Lyon (qui jamais ne fut Grue)
Trouva moyen, & maniere, & matiere
D'ongles, & dentz, de rompre la ratiere. . . (16-22)⁵

Marot のねずみはライオンが見つけた時には既に「生肉を食べて太り (pour autant qu'il avoit / Mangé le lard, & la chair toute crue)」、その場から「逃げられないで (ne sçavoit / Sortir d'ung lieu)」いる。Norman Shapiro によると、「肉を食べた (mangé le lard)」という部分は、先述した1526年の投獄の罪状が「四旬節に断食を破って肉を食べた」ことであるという事実を暗示し、自らを食べるべきでない肉を食べて捕えられたねずみにたとえた自伝的内容であるという (Shapiro 72)。

その一方で、M. A. Screech は、“mangé le lard” というフレーズは、1611年に編纂された Randle Cotgrave の *A Dictionary of the French and English Tongues* の “lard” (豚脂, ベーコン) の項目に “Il a mangé le lard” (He has eaten the

⁵ Marot の引用はすべて Defaux 編集の *Œuvres poétiques complètes* (1990) による。括弧内に行数を示す。また、引用部の日本語訳は全て筆者による。

bacon.) ということわざとしてあることを指摘する。その意味は, “He is most guilty, or he only is guilty. . .” である。Screech は, この Marot の使う “mangé le lard” というフレーズは, 「なんらかの詳細不明の罪に問われた」という意味で用いられたものであり, 具体的な事柄は指していないと指摘する (41)。このフレーズに関しては, Marot 研究においても様々に解釈が分かれているが, いずれにせよ当時の詩人がおかれた政治的背景を措いては読むことができない部分である。

Marot のライオンは導入部で, 言葉も発せず, 感情も表に出さない。ねずみを蔑むことも憤ることもなく, ただ後にねずみがそうして恩返しをするように, 淡々と罟を破ってねずみを救出する。ライオンの冷静沈着な様子は, 説明的で静かな語りそのものに反映されている。そして突然, 物語途中で語り手のユーモラスな合いの手が入る。

Jurant le dieu des Souriz, et des Ratz,
 Qu'il luy rendroit. Maintenant tu verras
Le bon du compte. Il advint d'aventure,
 Que le Lyon pour chercher sa pasture,
 Saillit dehors sa caverne, & son siege. (下線筆者 27-31)

「ここからがよいところ (Maintenant tu verras / Le bon du compte)」という口語的挿入を境に, ねずみがライオンを救出する場面へと移り変わる。語り手である Marot が介入することで寓話的な語りを一時的に遮断し, 読む者の意識を「現実」に引き戻す一行である。ではその「現実」とはどのようなものであろうか。

Marot の「現実」を引き出す鍵は, ここに描かれる寓話的動物たちの詳細な描写にある。そもそも, Marot のライオンは昼寝をしていない。ねずみを捕って食べようとしめない。他者により捕えられたねずみを命乞いされるまでもなく救出する。Marot のライオンは冷静で超然とした百獣の王にほかならない。この超越的なライオン像が寓話の枠から外れた Marot の現実と繋がるようである。この詩は, 明らかにライオンと Lyon という友人の名前をかけた友人への書簡であり, また Lyon その人に助けに来て欲しいと最後にはっきりと言葉にしながらも, 同時にやはりここでは, 百獣の王は国王 Francis I その人のアレゴリーとして読むことができるのである。ライオンを怒らせないねずみは, 獄中にありながら宗教的, 政治的にも国王権力に背く意思のない Marot 自身である。ねずみを迷わず救済するライオンは, 価値観の異なる少数派に対しても正当に対処し, 義をもって人民を統治する理想的君主像を体現するものと読むことができる。

Marot のバージョンより 1 世紀前の Henryson の “The Lion and the Mouse” においては、先述したように、ライオンが国王を意味することが明示され、権力者たちの政治的、道徳的あり方について次のように書かれている。

As I suppois, this mychtie gay lyoun
May signifie ane prince or empriour,
Ane potestate, or zit ane king with croun,
Quhilk suld be walkrife gyde and gouernour
Of his pepill, and takis na labour
To reule and steir the land, and iustice keip,
Bot lyis still in lustis, sleuth, and sleip. (1573-79)

Marot が描くライオンは、「ぼんやりと傍観するような (qui jamais ne fut Grue)」(*Epistre* 20) ライオンではない。「欲望に身をまかせ、怠惰で寝ているような (lyis still in lustis, sleuth, and sleip)」者は君主とは言えないと Henryson が述べるように、勤勉さと思慮深さを備えた Marot のライオンの描写からは、Marot が理想とする君主像とともに、作者の国王権力に対する忠誠心を見て取ることができるのである。後に述べるように、「書簡」と「寓話」がそれぞれ持つ性質を考えると、一見、友人への書簡という枠の中で語られているように見えるこの寓話は、牢獄まで助けに来て欲しいという差し迫った要求を友人に伝える嘆願であると同時に、国や国民を正しい姿勢で導くべき国王への信頼を広く表明する媒介として、二重に託された政治的役割を果たしているのである。

1526年の投獄を始めとして、Marot は生涯に幾度か投獄され、政敵から逃れて逃亡している。逃亡先でも国王やその他の人物にあてた書簡詩を多く書いた事実からは、獄中からの釈放、あるいは逃亡先からの召還を求めて、たとえそれが国王以外の別人に対する呼びかけを呈していても、Francis I に対する Marot の政治的アピールが常にあったことが伺えるのである。

Thomas Wyatt の「田舎のねずみと町のねずみ」

Wyatt の書簡詩は、書簡体風刺詩 (epistolary satire) とも呼ばれている。親しい宮廷人の John Poyntz に宛てたものが 2 編、同じく宮廷人の友人 Francis Bryan に宛てたものが 1 篇、合計 3 篇あり、宮廷生活で成功する処世術や隠遁生活のモラルの賛美などが書簡形式で語られる。Poyntz に宛てた風刺詩 2 編は

1536年に Wyatt が故郷ケント州のアーリントン城へ追放された際に書かれたとされている。1536年は Wyatt にとって暗黒の年である。Henry VIII の妃 Anne Boleyn と複数の宮廷人が不義密通の嫌疑で投獄され、処刑されたのは同年5月のことだ。Wyatt も投獄された1人だが、処刑を免れ追放の身分となった。この出来事は言うまでもなく、同年の夏に書かれたこれらの作品に少なからず影を落としている。

友人 Poyntz にあてた書簡詩の1つは次のように始まる。

My mothers maydes when they did sowe and spynne,
They sang sometyme a song of the feld mowse,
That forbicause her lyvelood was but thynne,
Would nedes goo seke her townyssh systems howse.
She thought her self endured to much pain. . . .

(*My mothers maydes* 1-5)⁶

田舎の居城で女たちが単調な家事仕事に合わせて歌うワークソングは、「野ねずみの歌 (a song of the feld mowse)」—先の章で参照した「2匹のねずみ」である。

Wyatt のバージョンには、この一般によく知られた「2匹のねずみ」とは異なる要素が複数存在する。今回特に注目するのは、①町のねずみが田舎に来る場面は存在しない、②町で突然現れる脅威は人間ではなく猫である、③田舎のねずみは二度と田舎に帰らない、この3つである。

まず1つ目のポイントであるが、Wyatt の「2匹のねずみ」の冒頭は、町のねずみが田舎を訪れるという場面ではない。最初から田舎のねずみは、“She thought her self endured to much pain” と自らの貧困を自覚し、不満を募らせている。そして自らの意志で町の姉のところへ行くことを選ぶ。

“My syster,” quod she, “hath a lyving good,
And hens from me she dwelleth not a myle.
In cold and storme she lieth warme and dry,
In bed of downe the dyrt doeth not defile
Her tender fote; she laboureth not as I;
Richely she fedeth and at the richemans cost,

⁶ Wyattの引用はすべて Muir & Thomson編集の *Collected Poems of Sir Thomas Wyatt* (1969) による。括弧内に行数を示す。また、引用部の日本語訳は全て筆者による。

And for her meet she nydes not crave nor cry.” (18-24)

田舎の描写はすべて、このような田舎のねずみの主観的な不平・不満、そして町に住む姉への羨望とねたみともいうべき形で語られる。「野ねずみの歌」というタイトルからもわかるように、田舎のねずみの視点により物語は語られ、初めから意識は町に向いているのである。一方で、田舎のねずみが町に着き、町のねずみの戸をノックするところから町の描写は始まるが、姉はおびえて出てこない。

And to the dore now is she come by stelh
And with her foote anon she scrapeth full fast.
Th'othre for fere durst not well scarce appere,
Of every noyse so was the wretche agast.
At last she asked softly who was there;
And in her langage as well as she cowl,
“Pepe”, quod the othre, “syster I ame here”.
“Peace”, quod the towne mowse, “why spekest thou so lowde?” (36-43)

戸口で声をかける田舎のねずみに対し町のねずみは、「静かに。なぜそんな大きな声をだすの! (“Peace. . . why spekest thou so lowde?”)」と返す。都会の刺激的な生活に慣れた典型的な「町のねずみ」とはかけ離れた反応である。

この Wyatt の町のねずみの描写について Colin Burrow や Greg Walker が指摘するのは、この詩が書かれたとされる2年前の1534年にチューダー朝のイギリスで制定された反逆に関する法律“Act of Treason”との関連である (Burrow 1993; Walker 2004)。Henry VIII 治世下の英国では、反逆罪に関する立法が史上最も頻繁に行われている。1534年の法律では、反逆罪の適用がそれまでの「反逆の意思を示す行動」から「反逆の意思を示す言葉」にまで拡大されている。

if any person or persons. . . do maliciously wish, will or desire by words or writing, or by craft imagine, invent, practise or attempt any bodily harm to be done or committed to the King's most royal person. . .

(G. R. Elton. *The Tudor Constitution: Documents and Commentary*. 62)

このように、書いた文字、発する言葉の一つが反逆的な意図をもつものと曲解され、自らのキャリアにとって致命傷と成り得る政治状況が、町のねずみの過剰ともいえる音への反応に現れている。

皮肉なことに、この後の展開において、音のない密やかな脅威が2匹のねずみに忍び寄る。先述した2つ目のポイントがこの「町の脅威」についてである。「腰かけの下に丸い頭ととがった耳をもつ、2つの光る目に彼女は気づいた (Vnder a stole she spied two stemyng Ise / In a rownde hed with sherp erys)」(53-54)、というその生き物の正体は10行以上明かされない。1484年のCaxtonの版では、ねずみを脅かすのはワインセラーを管理する使用人である (as they were etynge / the bouteler of the place came in to the celer) (17)。古くはHoraceのサティアにも「2匹のねずみ」は使われているが、ここでは大きな声で吠える犬が登場する (Satires, II. vi. 114)。Wyattのバージョンの元になった1つと考えられているHenrysonの版では、人間が最初に現れて去った後、次に猫が入ってくる。はたして、Wyattのねずみを恐怖に陥れたのも「裏切り者の猫 (traytour Catt)」(66)であった。そしてこの猫が“traytour”と形容される理由はこの書簡詩が書かれた時代背景に目をむけると見えてくるようである。この「猫」についてさらに詳しく見てみたい。

MarotとWyattの「猫」

「猫」は言うまでもなく、ねずみの天敵である。OED (*cat*, n.¹. 1.1.a)には“A well-known carnivorous quadruped (*Felis domesticus*) which has long been domesticated, being kept to destroy mice, and as a house pet”とある。中世から16世紀のルネサンスにかけて広く読まれていたIsidoreの*Etymologies*によると、ラテン語で“musio (mouser)”の項目には、一般に人は“cattus”と呼ぶ、とあり、それは“captura”(catching)、あるいは“cattat”(it sees)という、夜の闇も見通して獲物をとらえる視力の良さからそう呼ばれるとなっている。この語源が当時の一般的な猫のイメージであると言えるであろうが、WyattとMarotの作品に言及される「猫」にはどのような意味が付されているのだろうか。

ワインセラーに入ってきた人間がねずみに気付かず立ち去り、ねずみは難を逃れるという多くの典型と比較すると、Wyattの作品では、はるかに切迫した音のない緊張感が「猫」の侵入でもたらされる。ドアの音も鳴き声もなく、息を潜めて獲物に忍び寄る猫の動物的特徴は、常に普遍性を備えた寓話的なものであると同時に、言葉による (by words) 反逆罪という、音そのものに対する意識を過剰なまでに高めなければならなかった時代特有の空気を感じさせる。

Burrowが“A thing without words is *always there*. . . , always hiding under a chair to get you.”(41)とHenry VIIIの宮廷について述べているように、Wyattの猫に付された“traytor”という形容は、国王の無数の目となり耳となりうる宮

廷内の全ての人物に向けられたものに思われる。さらには田舎のねずみの描写にも、猫の存在を視界にとらえた際に、“she spied two stemyng Ise”と単に「気づく」以上の含みを連想させる動詞“spy”が用いられている。立場はいつ何時逆転してもおかしくはない。誰もが猫にもねずみにも成り得る当時の宮廷世界が、投獄と追放を経た作者自身の言葉で人間不在の動物寓話の中に凝縮されている。

「猫」は、Marotの「ライオンとねずみ」でも言及される。これはMarotのオリジナルと思われ、このバージョンの1つの大きな特徴である。ライオンがねずみに助けられる場面で、次のようなライオンのセリフがある。

... ô pauvre vermyniere,
 Tu n'as sur toy instrument, ne maniere,
 Tu n'as cousteau, serpe, ne sepillon,
 Qui sceut couper corde, ne cordillon,
 Pour me getter de ceste estroicte voye;
 Va te cacher, que le Chat ne te voye. (49-54)

ここでは、ねずみごときにライオンを救う手段も術もないとして、ライオンは現状を諦観している。このライオンが「猫が見つかるから隠れる (Va te cacher, que le Chat ne te voye)」と自分以外の第3の脅威に言及し、姿こそ現さないものの猫の存在が示される。それまでのライオンの尊大な態度を考えると、ねずみに注意を促すこの1行は幾分唐突で不自然な印象を与える。

ここで、この寓話がMarotから友人への助けを求める書簡形式で語られることを思い出さねばならない。1522年に出版された*On the Writing of Letters*の中でErasmusは、助けを依頼する手紙の類の書き方について“The letter of request”と分類し、相手の心を動かすためのヒントの1つを“In the person of rivals, we shall show that we harbour hostility for the same men...”(173)と述べている。ここでいう“rivals”はこの時代、特に宮廷界において、“close friends”と同義である。共通の敵が身近に潜むという意識を共有し、より相手の共感を得るための術が、Marotの書簡詩にも用いられている。

ライオンとして呼びかけられるLyon Jametという人物は、Marotの親しい友人である。1534年の10月のある夜、カトリックの教義を批判する文書がパリの町の各所に張り出されるといふ檄文事件がおこった。これを境にプロテスタントに対する弾圧が激しくなったと言われるが、これに関わった73人の異端者のリスト

⁷ 檄文事件とマロの関わりについては伊藤(1975)の論文を参照。

に Marot と Lyon も含まれていた。⁷ 両者とも逃亡している。すなわち Lyon は Marot と立場を同じくする一宮廷人であり、実情はねずみの 1 匹である。史実を見ても彼らに共通の政敵がいたことは明白であり、自分の現状を提示することで Lyon にも警告を促す要素がこの「猫」への言及に見られるのである。いずれにせよ、“domesticated” (OED *cat*, n.¹. 1.1.a) と考える方が自然な猫が、ライオンが罫にかかるような森の中でてくる可能性への示唆は、何かしらの意図を持ってライオンの口から出たものに違いないのである。

16世紀のヨーロッパ宮廷という特有の政治世界で活動した2人の宮廷詩人は、常に不特定多数の「猫」の存在を感じていたはずである。彼らの用いる「猫」の寓意は、「闇を見通し、ねずみを捕まえ、殺す」という猫本来の特質そのまま、十分な政治性を帯びているのである。

寓話の結末

Wyatt の「2匹のねずみ」は、「猫」に捕らえられた Wyatt の田舎のねずみが、その意に反して (“against her will”, 67) 捕まったまま、今にも殺されるという場面で終わる。先述の3つ目のポイント—田舎のねずみは二度と田舎へ帰らない—である。現実の詩人が問われた反逆罪の例にもみられるように、町 (= 宮廷) の生活には物質的な豊かさと同時に生命の危機が常につきまとうという厳しい実情を体現した結末である。思い返してみれば、自らの貧困に絶望し町へ出ていくことを選択した Wyatt の田舎のねずみには、田舎で飢え死にするか、町で非業な死をとげるか、最初からその選択肢しかない。そしてこの結末のサスペンスが示すように、作者自身、田舎か町かというジレンマにははっきりと答えを出していない。

寓話の部分に続く Wyatt の説くモラル (教訓) には、次のような一節がある。

Eche kynd of lyff hath with him his disease.
 Lyve in delight evyn as thy lust would,
 And thou shalt fynde when lust doeth moost the please
 It irketh straite and by it self doth fade.

 Thy self content with that is the assigned
 And vse it well that is to the allotted. (80-83, 95-96)

“Eche kynd of lyff hath with him his disease.” と述べる作者は、“Thy self

content with that is the assigned / And vse it well that is to the allotted.” というように、自らのうちに内在化した幸福を求めるよう Poyntz に助言する。先述したように、一般に知られる「2匹のねずみ」の物語の本来の教訓に沿えば、田舎と町の二項対立が提示されたうえで、田舎の平穏な暮らしが賛美されてしかるべきである。しかしながら、Wyatt のバージョンでは「母の使用人たち」が歌う歌は「野ねずみの歌」とあるように、田舎から町への一方向のベクトルしか伸びておらず、宮廷から田舎へという、当時人文主義者が求めた理想のテーマから、Wyatt の寓話の結末はあえて逸脱している。すなわち Wyatt の寓話の結末のサスペンスは田舎／都会という二項対立を越え、Poyntz をはじめ読む者を、場所にとらわれずに内的な幸福を追求すべきであるという人間の精神性の問題へと導いているのである。そして、この「精神の平穏」という Wyatt が好んで用いた詩的テーマは、自らの政治的危機を反映した詩人の諦観を表すものとも言え、そこに高度な政治性を見て取ることができるのである。

一方、Marot の「ライオンとねずみ」の結末は、ねずみが奮闘の末に縄を噛み切りライオンを救うという、比較的オリジナルに忠実なものである。Marot は最後に Lyon に次のように呼びかける。

Or viens me veoir, pour faire le Lyon:
Et je mettray peine, sens, & estude
D'estre le Rat, exempt d'ingratitude:
J'entends, si Dieu te donne autant d'affaire,
Qu'au grand Lyon: ce qu'il ne vueille faire. (72-76)

この最後のスタンザは、この詩が獄中の詩人から友人に助けを求める即時的な書簡であることを思い出させる。寓話の延長として読むならば、地位や力の差はあれ友人として助け合う相互の役割が再確認されるどころだが、一方で“pour faire le Lyon”, “Et je mettray peine, sens, & estude / D'estre le Rat” という一部に目をむけると、「為政者として役割を果たすべきだ」、「自分はあなたの忠実な廷臣である」という、呼びかける相手を権力者にすり替えた獄中の詩人の生の叫びが聞こえるようである。

結び

16世紀の Marot と Wyatt の寓話を見る上で、中世以降のイソップ寓話の例として今回特にとりあげた Caxton, Henryson, L'Estrange の寓話集は、「イソッ

ブ寓話集」あるいはその他の寓話も含めて編纂された「寓話集」に収められたものである。一方で、MarotとWyattのイソップ寓話を読むとき、彼らの寓話に込められた政治性は、Caxton版からL'Estrange版へと続く寓話の政治化の一連の流れの中に見埋没するかのように見える。しかし私たちは、彼らの寓話が、「寓話集」に含まれるものでなく、書簡詩の一部を構成する詩の要素であることを忘れてはならない。

受け手が明確に示される、「書簡詩」というジャンルに分類されるこれら2つの作品であるが、宮廷詩や書簡を回して読むサークルが存在した16世紀当時であっても、これらの作品はやりとりをする二者間以外の読者を想定して書かれていたといえる。さらに言えば、英国に至っては「言葉」そのものに対する反逆罪の適用があったことを考えると、どのような形の書きものであれ、想定外の読者に読まれることも当然想定して創作活動はなされていたはずである。そしてこのことは、2つの書簡詩の導入部を見ると明らかなのである。

Marotの*Epistre*の導入部には、“Je ne t'escry...”とこれから書く内容が愛や道徳などを歌う従来の詩のテーマではないことを10行以上に渡って述べ、万人にわかる「よいお話」を話す(“Mais je te veux dire une belle fable”) (14) ことを強調する一行がある。またWyattの場合は、「母の使用人たち」が糸紡ぎや裁縫という単調な繰り返しの労働をしながら歌う歌が「野ねずみの歌」であるという牧歌的な出だしで、それが幅広い読者層に向けた語りであることを示唆する。語りが社会的地位の低い田舎の女使用人たちであること、Wyattのねずみたちが雌の姉妹であることなどから、読者はこれから始まる話の単純さ、そしてその非政治性までも予想することになる。

しかしながら、自らの記述の非政治性をアピールするかのような彼らの努力にもかかわらず、彼らが「獄中」あるいは「追放先」で書いた書簡にイソップ寓話を取り入れた時点で、すでにその寓話の政治性は決定されたといってい。L'Estrangeの寓話集が大衆に対してその政治性を明確にするのに対し、16世紀のMarotやWyattが扱うイソップ寓話は、書簡という形式である限り、やはり政治的背景を共有する読者に対する、限定的な時事性を有しているからである。そして書簡という枠があるが故に、想定外の読者たちはそこに引用された具体性の高い寓話に、強い政治的興味を持たざるを得ない。このように、私的で即自的な「書簡」と大衆的で普遍的な「寓話」という一見対照的な2つのジャンルは、両者が時代特有に併せ持つ書簡の「大衆性」と寓話の「時事性」を考えると、自然と融合するのである。

MarotとWyattによる書簡詩における寓話を題材とした政治的示唆の試みは、その政治性をより表面化させる17世紀以降の寓話創作にむけた助走ともいえるべき

流れの中にある。自らその政治性に言及して寓話集を出版した後代の L'Estrange とは違い、彼らの寓話に込められた政治性は書簡詩という覆いの下に秘められ、君主やその他の「猫」たちの目をくらす必要があったのである。寓話のもつ政治的アレゴリーという側面は、16世紀の政治世界に生きた2人の経験により裏付けられ、時代によって強調されているのである。

広島工業大学

参考文献

- Burrow, Colin. "Horace at Home and Abroad: Wyatt and Sixteenth-Century Horatianism." *Horace Made New: Horatian Influences on British Writing from the Renaissance to the Twentieth Century*. Eds. Charles Martindale and David Hopkins. Cambridge: Cambridge UP, 1993. 27-49.
- Caxton, William. *The Fables of Aesop, as first printed by William Caxton in 1484, with those of Avian, Alfonso and Poggio, now again edited and induced by Joseph Jacobs*. London: D. Nutt, 1889. *Open Library*. <<http://www.archive.org/stream/fablesofaesopasf01aesouoft#page/n11/mode/2up>>.
- Elton, G. R. *The Tudor Constitution: Documents and Commentary*. Cambridge: Cambridge UP, 1978.
- Erasmus, Desiderius. "On the Writing of Letters." *Collected Works of Erasmus*. Ed. J.K. Sowards. London: U of Toronto P, 1985. 1-254.
- Fox, Denton, ed. Introduction. *The Poems of Robert Henryson*. Oxford: Clarendon P, 1981. xiii-xxv.
- Henryson, Robert. "The Fables." *The Poems of Robert Henryson*. Ed. Denton Fox. Oxford: Clarendon P, 1981. 3-110.
- Horace. *Satires, Epistles and Ars Poetica*, Trans. Rushton Fairclough. London: Harvard UP, 1966.
- Isidore. *Etymologies*. Ed. and trans. Stephen A. Barney. Cambridge: Cambridge UP, 2010.
- L'Estrange, Rodger. *Fables of Aesop and other Eminent Mythologists: with Morals and Reflections*. London: R. Sare, 1692. *Open Library*. <http://openlibrary.org/books/OL6979_556M/Fables_of_Aesop_and_other_important_mythologists>.
- Marot, Clément. *Œuvres poétiques complètes: L'Adolescence clémentine*. vol. 1. Ed. Gérard Defaux. Paris: Bordas, 1990. 21-200.

- Patterson, Annabel. *Fables of Power: Aesopian Writing and Political History*. Durham & London: Duke UP, 1991.
- Screech, M. A. *Clément Marot: A Renaissance Poet discovers the Gospel*. Leiden: Brill, 1994.
- Shapiro, Norman R. *Lyrics of the French Renaissance*. Chicago and London: U of Chicago P, 2002.
- Walker, Greg. *Writing Under Tyranny*. Oxford: Oxford UP, 2004.
- Wyatt, Thomas. *Collected Poems of Sir Thomas Wyatt*. Eds. Muir, Kenneth, and Patricia Thomson. Liverpool: Liverpool UP, 1969.
- 伊藤進「クレマン・マロと〈黄金の世紀〉」(『中京大学教養論叢』1975年 第16巻 第1号, 145-70)

Political Aspects of Aesop's Fables in
Sixteenth-Century Epistolary Poems
— Clément Marot and Thomas Wyatt —

Yoshiko Kusunoki

Aesop's fables have been universally popular for centuries. In the common perception, they have been employed mainly for the purpose of children's education, learning grammar, rhetoric, and everyday morals. Annabel Patterson suggests that the beginning of the political use of Aesop's fables dates back to John Lydgate in the 14th century, and that the significance of the fables culminated around the 17th century. In this thesis, I focus on the Aesop's fables of the 16th century; the ones included in epistolary poems written by two Renaissance courtly poets, Clément Marot and Thomas Wyatt, and discuss the political features involved in their poems.

Marot and Wyatt were contemporary courtiers of the court of Francis I, and the court of Henry VIII. They had similar experiences as a courtier, going through bad times of imprisonment. In 1526, Marot was sent to prison as a result of accusations of heresy and was released later. This imprisonment made Marot write an epistle to ask for a rescue to his close friend, Lyon Jamet, *Epistre à son amy Lyon*. As for Wyatt, he was imprisoned for adultery with Anne Boleyn in 1536. He got released soon after but was sent home to Kent, which was an exile from the court. Around this bad time, he composed an epistolary satire, *My mothers maydes*.

Each of their epistolary poems cites one whole story of Aesop's fables: for Marot, *The Lion and the Mouse*, and for Wyatt, *The City Mouse and the Country Mouse (The Two Mice)*. The poets had made some changes on the originals, minor or major, and these modifications get each poem out of the frame of publicly comprehensible fables.

For example, in Marot's *The Lion and the Mouse*, he modifies both of the characters. Marot's mouse has already been caught by a third person just as the poet himself has been imprisoned. The lion, originally showing disrespect for the mouse, appears here as the lion of discretion, helping the mouse in a straight forward manner. Later, following the original, the mouse repays the lion's mercy by cutting the net in which the lion gets entangled. In *The Fables*,

published in the end of 15th century, Robert Henryson clearly writes of the same tale that the lion represents a human King, and implies the King's misrule. On the other hand, Marot's description of the diligent and gracious lion shows, it seems, Marot's own faith in the King, Francis I.

In Wyatt's *The Two Mice*, one of the most striking changes to the original is that Wyatt's country mouse does not return to her country home. Caught by the "traytor cat", she fails to escape the unfamiliar danger in town; the ending is suspended in that fearful moment. Moreover, interestingly enough, not only the country mouse, but also the town mouse seems afraid of the life in town, afraid to make noise, or even breathe. As previous study suggests, the description of Wyatt's scared town mouse apparently reflects the construction of Treason Law in 1534 which clearly mentions "Treason by words". The common idea of the dichotomy of town and country cannot simply be applied to Wyatt's version. Also, read in the light of the historical background, the animal characters of Wyatt's tale appear to be not fabulous but rather take on a real aspect of Tudor courtiers.

At first, Aesop's fables were passed down by oral tradition as Wyatt's mother's maids sing "a song of a field mouse". As time progressed, and especially after the invention of printing in the late 15th century, they were more used as educational materials by medieval literalists and Renaissance humanists. At the same time, however, the simplicity of the little tales was starting to be used for covert political expressions. Marot and Wyatt produced independent versions of a classic model with their significant adaptations of sources based on their own stories. The time of Marot and Wyatt, the beginning of the 16th century, was a transition phase; the disguise of "simple" fables was now entering the zenith of more political fabling.